

中長期目標 (学校ビジョン)	学び 輝き 感動のある学校 幼児・児童・生徒が充実した学校生活を送り、個々の可能性を伸ばし、よりよく生きることができるようにする学校 《 1 8 歳で自立できる人を育てる ～将来を見とおした今のＱＯＬの向上～ 》	今年度の重点目標	1 幼児・児童・生徒一人一人が「生き生きと学ぶ」教育に努める。 2 安心できる保健、給食体制を築く。 3 開かれた学校を推進する。 4 キャリア教育や地域支援の充実に努める。
-------------------	--	----------	--

年 度 当 初					評 価 結 果 (2) 月			
評価項目		評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	取り組みから見えてきた課題
一人一人が「生き生きと学ぶ」教育の充実	小学部	自己理解に基づく心の安定と健康回復への意欲を育てる指導と支援の充実	○自分の心身の状態について、次第に客観視できるようになり、言葉で訴える力もついてきた。不調な時の対処法を考えることができはじめている。 ○学習に集中できる時間が短く、緊張度の高い場面では、強い疲労感を訴えるため、学習内容や量、時間などを柔軟に調整する必要がある。	○病気や特性についての自己理解が進み、自分に合った方法で不安を軽減しながら、心理的に安定して過ごすことができている。 ○学校生活において充実感や達成感を得ながら、将来に希望をもち、生き生きと学んでいることが、年2回のアンケートで確認できる。	○医師の指示の下、緊張や不安の程度、過敏性や疲労度に応じて学習内容の変更や調整を行う。 ○「わかる授業」を第一に、授業改善する。 ○自立活動での「自分の取り扱い説明書」づくりを通して、病気や特性への理解を深め、自己管理する力がつくように支援する。 ○適切な学びの場が選べるように、卒業後の就学先について児童と保護者に十分な情報提供を行う。	○自立活動の取り組みや医療との連携等により自己理解が進み、自分の状態を言語化して他者に的確に伝える力や、不安や不調の要因を分析して自分なりに対処する力がついた。 ○不安や不調を招く要因を予想し、具体的な予防策を考えて生活できるようになった。 ○学習でも生活でも、これまで難しかったことに挑戦し、充実感や達成感を得た。 ○本人も保護者も、体験学習等を通して納得して卒業後の就学先を選ぶことができた。中学校生活を意識して課題に取り組んできた。	A	○1年間欠席無く登校し、終日学校で過ごしているが、不安や不調の波はまだあり、日常生活の中で、考え過ぎと分かっているにもかかわらず強迫観念がある。 ○中学校での新しい生活は、大きな環境の変化を伴う。希望や期待以上に、不安や不調が増大することが予想される。今後も医療との連携を十分に図り、病状に応じて無理なく中学校生活が送れるよう、学習面・生活面での配慮や調整等について、中学校に確実に引き継ぐ必要がある。
	中学部	自己理解に基づく心の安定と進路決定に向けての意欲を高める支援の充実	○様々な取り組みをスモールステップでやり遂げることで、自分に対して自信が持てるようになってきている。 ○ストレス緩和が苦手で、不得意なことに対して自分に合わせて取り組むことが十分にできていない。	○将来に向けて、自己の課題を認識した上で進路選択ができ、自分に合った方法で苦手なことにも取り組めるようになってきていることが、年2回のアンケートで確認できる。	○「自分の取り扱い説明書」づくりを通して自己理解を深め、客観的に自分が見られるようにする。 ○教職員が個々の進路に対する課題を把握して高校調べや高校体験などの学習を進める。 ○本人、保護者、教職員が毎日の連絡を通して体調や学習の状況を共有し、個に応じた学習指導や進路指導に努める。	○授業の様子やアンケートの結果から「自分の取扱説明書」づくりを通して自己理解が深まり、以前より苦手なことにも取り組めるようになってきていることが確認できる。 ○生徒が自分に合った進路選択ができるよう高校調べや高校体験などの学習を進め、進路について日頃から生徒や保護者とのコミュニケーションを大切にすることができた。 ○不安に対してストレスを緩和する方法がまだ少ないことが課題である。	B	○生徒の実態を把握し、スモールステップで生徒が様々のことを経験し、その達成感を次へのやる気につなげていくサイクルを繰り返していくことが大切だと感じた。 ○今年度取り組んだ「自分の取扱説明書」づくりを通して、自身について「よく知り」、「理解する」ことで客観的に自分を見ることができるようになり個々の成長につながった。
ニーズに対応できる専門性の向上	研究部	生きる力に結びつく進路指導と授業改善の推進	○ＩＣＴを用いた本校との交流や連携を通し、機器の使い方を習得して授業に活用することで、児童生徒がより深い学びを体験できるようにする。 ○全員が卒業学年であり、昨年以上に児童生徒の進路指導に結びつくような専門性の高まる研修を持つ必要がある。 ○皆浜分校の一員としての自尊感情を高める学習を進めている。	○定期的かつ計画的に設定された教職員の研修・研究が、ＩＣＴの活用も含めた授業改善や、本校との交流等に活かされ、分校児童生徒全員が自分の将来を見通した進路保障・進路選択ができている。	○月1回を目安に、教育相談や病気、障がいの特性についての研修を工夫し、教職員の専門性をより向上させて、進路指導に活かす。 ○本校、医療、スクールカウンセラー等と連携して、進路決定だけでなく、その先までを見据えた適切な進路指導を行う。 ○進学や受験対応を考慮した、確かな学力を身につけるための授業改善を行う。	○進路指導について、心身症の特性を踏まえた普遍性のある研修、及び高校進学など具体的な進路に向けての職員研修は進めることができた。 ○学校の一員としての自尊感情を高める学習については、昨年度の取り組みを継続して成果を上げることができた。 ○ＩＣＴ活用は本校の協力もあり進んでいるが、個々の教職員の活用スキルを向上させる研修については更に工夫が必要である。	B	○研修が日々の業務の負担にならないように、業務状況を把握したり長期休業等に行ったりするなど、計画的・効果的な研修の場を企画し、より充実した研修を進める必要がある。 ○コロナ禍の学校現場でＩＣＴ活用の重要度が増す中、それを指導に用いる教員側のスキルが追いついておらず、一層の実務研修の重要性を強く感じた。
	支援部	将来を見据えた教育相談と進路指導の充実	○児童生徒の実態に応じ、日々のきめ細かな配慮はできているが、将来の生きる力（自立）につながる教育相談、進路指導の弱さがある。 ○児童生徒の実態（心身症）から、学校外での体験活動を通して、一人ひとりが自分の将来を見通すことができる進路指導に難しさがある。	○児童生徒が個々の病気を自己理解し、進んで改善、克服しようと努力している。 ○児童生徒が個々のキャリアパスポートを作成することにより、将来の夢と希望を持ち自分の生き方を考えている。 ○児童生徒や保護者が、支援を受けているという安心感を年2回のアンケートで確認できる。	○自立活動の指導、個別の指導計画、個別の教育支援計画及びキャリアパスポートを活用し、全教職員が共通理解を図りながら指導する。 ○医療、スクールカウンセラー等と連携して継続的な支援を行い、卒業後を見据えた適切な指導を行う。	○自立活動を中心とした日々の指導を通して、自己認知が深まり日常生活でも前向きな行動や発言が見られようになった。また、小中の学部を超えた学習を通して一体感も生まれ協力して物事に取り組む姿も見られるようになった。 ○卒業が近づくにつれて、進路への不安感から、学校生活に集中できない生徒はいるものの全体としては、自分の将来について向き合うことができるようになった。	A	○自立活動の学習を中心に各指導計画を全職員が共通理解を図りながら指導することにより、児童生徒が個々に自己理解と病気の改善克服を進めることに繋がった。 ○毎月1回のカンファレンスでの学校医、スクールカウンセラー等の指導・助言を日々の指導にいかすことができた。
学 校 と 生 活 全 面 に お け る 健 康 安 全	健康安全全部	○安心して登校できる環境作りと個々の心身の状況に応じた支援の充実	○緊張の連続、疲れ、不安などから学校や学習や行事などに向かえない児童生徒がいる。 ○生活リズムが定着しない生徒があり朝の登校に間に合わなかったり遅刻・欠席となることがある。	○児童生徒が卒業後の自分をイメージし、社会の中で生きていくために、病状から来る困難さを軽減し生活を整えようとしていることが、教育相談や懇談で確認できる。	○心身の状態を把握する健康観察や情報収集に努め、各学部、支援部、外部機関とも連携して生活・学習の面でも個々に応じた指導支援をしていく。 ○保護者や関係機関と連絡を密に取りながら、児童生徒が自分の病状の理解を深めるとともに、病状から来る困難さを自分に合った方法で軽減しながら学校で過ごせるように支援していく。	○児童生徒が困ったときに相談できる相手が増えたり、解決方法を見つけたりすることができるようになってきている。 ○自立活動や対話を通して自分を見つめ、進路について考えたり、病状から来る困難さに気づき、軽減するための方策を考えたりすることで生活を整えようとする意欲につながった。	A	○職員で情報を共有したことや外部機関との連携を通して支援してきたことが児童生徒の成長につながった。 ○今後も医療や外部機関とつながりながら進学後も安心して過ごせるよう進学先との引き継ぎを丁寧にする必要がある。